病 防 第　317 号
令和 7 年 12 月 1 日

関係機関長　殿

沖縄県病害虫防除技術センター所長
（　　公　　印　　省　　略　　）

病害虫発生予察技術情報について

令和7年度病害虫発生予察技術情報第 13 号を発表したので送付します。

令和7年度病害虫発生予察技術情報第 13 号

野菜類における菌核病の防除対策について

野菜類における菌核病は、12 月から 2 月の低温多湿時に多くみられるようになります。また、出荷後に発病して市場病害となる場合もあります。収量や品質確保のために、本病の防除対策を徹底しましょう。

1　発生生態

(1) 本病は、菌核病菌（*Sclerotinia sclerotiorum* (Libert) de Bary）が寄生することにより発生する。本菌はさやいんげんやレタス、キャベツ、とうがんなど多くの植物を侵す多犯性で、連作畑で多発しやすい。
(2) 病徴は、初め水浸状の病斑を生じて軟化腐敗し、続いて白色の菌糸を密生し、のちにその表面に黒色のネズミ糞状の菌核を形成する（図1、2、3、4）
(3) 本菌は、罹病部との接触等により伝染する。また菌核は土中で長期間生存し、気温20℃前後で降雨が多い多湿条件になると子のう盤を生じ、子のう胞子が飛散してまん延する。
(4) 低温期に施設内が密閉されると多湿になり、結露が生じ多発を招く。また、窒素過多や密植、過繁茂な状態は、発病を助長する。

2　防除対策及び注意すべき事項

(1) 発病株、発病部位は、菌核が形成される前に早めに除去し、ビニール袋に入れるなどしてほ場外へ持ち出し処分する。
(2) 排水を良くし、施設では十分に換気を行い、多湿にならないようにする。
(3) 補植や植替えを行う場合は、発生源となる地際部の菌核を残さないよう株周囲の土壌ごとほ場外へ持ち出し処分する。
(4) 多発ほ場では連作を避ける。また、本病が発生しやすい作物間との輪作は避ける。
(5) 出荷後に市場等で発病が確認される場合もあるため、ほ場での薬剤防除を徹底する。
(6) 多発ほ場では栽培終了後に天地返しを行う。

図 1. さやいんげんの莢の病徴

図2. レタスの病徴

図3. キャベツの病徴

図4. とうがん茎葉の病徴

★詳しくは沖縄県病害虫防除技術センターにお問い合わせ下さい★
TEL：（本所）098-886-3880、（宮古駐在）0980-73-2634、（八重山駐在）0980-82-4933
https://www.pref.okinawa.jp/shigoto/nogyo/1010700/index.html